顧客に対しても気をつかっている。お米は単品よりもブレンドした方が味があるという。

”十和錦“３に対して”ヒノヒカリ“６から７の割合で混ぜ、しかもお客様の好みを聞き調合の割合を変えているのである。まさに顔が見えていないと出来ない芸当である。そのブレンド米、手作業で混ぜている。「おいしくなれ」と念じながら混ぜているだろうと想像しながら話を聞いた。

最後に、おいしい米、安心安全な米を提供する為には「手間をかける。手間をおしまない」と言った。

市川　幸さん（数神）

解説　カルテック農法

微生物利用の減農薬、減化学肥料に取り組む農法。地力づくりとして前年度中にラクトバチルス（乳酸菌）と硫安、それに魚粉米ぬかを混ぜたものをすき込む。田植前、田植時における元肥は入れず、田植後１カ月間も肥料は与えない。出穂50日前、最高分げつ期を狙って硫安、出穂25日前、尿素（３～４kg／反）を施肥。根を大切にし、無駄な分げつをさけ本当に必要な本数の太茎だけ育てる農法。（６月初旬までしょぼしょぼで大変寂しい姿。ここが我慢のしどころと聞いた）

その後、立派な根を伸ばし、元気な稲穂をつけるために！

霧が育てる仁井田米

薄井流「疎植水中栽培」に学ぶひとつのもの

ＪＡ四万十では４年ほど前から、福島県の稲作実践家である薄井勝利氏を招き稲作講演会を実施しています。薄井氏の唱える「疎植水中栽培」は、田植え後稲の生育にあわせて深水管理を行い、出穂45日前には30cm（最低でも20cm）までの深水とすることで太茎の稲をつくることを特徴とし、慣行栽培とは大きく異なって、なかなか真似のしがたい稲つくりと写っているようです。

しかし、薄井氏が現在の農法に至ったのは、稲の発育生理を実践的且つ、徹底して追及した結果であり、その基本ともいえる稲の葉令に基づく生育パターンの把握は、稲つくりの共通項として学びたいものです。

田植え時の葉令（稚苗で2.5葉、中苗3.5葉、成苗5.5葉）から生育にしたがって「主茎」の展開葉令を出穂まで追うことで稲つくりの面白さがいや増すこと間違いなしです。

（ＪＡ四万十　古谷幹夫）